

第104回日本精神神経学会総会

シンポジウム

女性精神医学の今日的課題

コーディネーター 狩野 力八郎, 平島 奈津子

女, 女性, 妻, 母親, 主婦, といった生物学的な性差さらには心理-家族-社会的な役割関係は, 両性に共通な精神医学とは異なった臨床的問題を析出しますし, 異なった臨床的アプローチを必要とします。これらは, 医学の中で伝統的に確立している産婦人科という領域の課題として還元してしまうにはあまりに広く深すぎます。わが国でも, こうした意味での女性精神医学の意義は, すでに認められつつあり最新の課題とは言えません。また, 女性精神医学は精神医学のほかの主要な分野に比べれば, はるかにマイナーな分野です。しかし, それは, 心理-家族-社会的役割関係に基づいているがゆえに社会的動向の影響を受けやすいとも言えます。おそらく私たち臨床精神科医がこの分野につねにアンテナを張り巡らしていないと, そして過去の情報に満足しているとすぐに置いていかれてしまうでしょう。

その意味で, 精神科医がつねに臨床的関心をもたねばならないし, 精神神経学会でもつねに取り上げていかねばならない問題と考えて, このシンポジウムを企画しました。この分野で発言されている先生は少なくないのですが, 今回私たちコーディネーターは, シンポジストとして多彩な分野からの先生にお願いすること, そして性差に偏ら

ないよう男性2人, 女性2人をお願いすることの2点に留意しました。

こうした考えで, 産婦人科, 内科, 皮膚科, 障害者治療, 心理療法などを包含して臨床実践をされている東京女子医科大学付属生涯女性健康センター所長の加茂登志子先生, 産後うつ病の臨床・研究における第一人者で, 厚労省の母子メンタルヘルス・プロジェクトで主要な役割を果たされている岡野禎治先生 (三重大学保健管理センター・大学院医学研究科), 国立生育医療センター心の診療部育児心理科で活躍され, DV の子どもへの外傷的影響についていち早く取り組んでこられた笠原麻里先生, 多様な問題に関する夫婦療法を実践し, わが国の家族療法・夫婦療法の第一人者である中村伸一先生, といった4名の先生にシンポジストをお願いしました。

各先生のご発表は, 非常によくまとまり整理されたものであり, しかし臨床実践に裏打ちされているため教科書的でなく, 臨床の知恵, 情報が豊かでした。こうした明日からの臨床に役立つ話を聞かれた参加の方々は大変満足したのではないのでしょうか。先にも述べましたが, このテーマはぜひ毎年本学会総会で取り上げられることを祈念しています。